

主 文

被告人を懲役１０年に処する。

未決勾留日数中２００日をその刑に算入する。

押収してあるハンマー１本（平成１３年押第２８９号の１）を没収する。

理 由

（罪となるべき事実）

被告人は、

第１ Ａ及びＢが、共謀の上、法定の除外事由がないのに、平成１３年３月２１日午後１１時ころ、東京都ａ区内のマンションの共用通路において、自動装てん式けん銃１丁を、これに適合する実包５個と共に携帯して、所持し、居室の玄関ドアノブに向けて前記自動装てん式けん銃で弾丸５発を発射する各犯行を行うに際し、その情を知りながら、同日午後１０時４０分ころから同日午後１１時ころまでの間、同都ｂ区内の路上から同都ａ区内の路上に至るまで自己の運転する普通乗用自動車に両名を乗車させて送り届け、もってＡらの前記各犯行を容易ならしめてこれを幫助し、

第２ Ｃ及びＤと共謀の上、同年５月２２日ころ、同都ｃ区内の駐車場において、Ｅ所有に係る普通乗用自動車１台（時価約５０万円相当）を窃取し、

第３ 同月２８日午前１１時４５分ころ、同都ｄ区内のマンション敷地内において、Ｆ所有に係る普通乗用自動車１台（時価約３５０万円相当）を窃取し、

第４ Ｃ及びＧと共謀の上、同月２９日午前９時３０分ころから同年６月１日午後６時３０分ころまでの間、同都ｅ市内の立体駐車場１階において、Ｈ管理に係るハイウェイカード１枚外１６点（時価合計約２５万３０００円相当）積載の普通乗用自動車１台（時価約１５０万円相当）を窃取し、

第５ Ｃと共謀の上、同年６月１６日ころ、同都ｆ区内の駐車場において、Ｉ所有に係る普通乗用自動車１台（時価約４０万円相当）を窃取し、

第６ Ｄらと共謀の上、同年７月３日ころ、同都ｃ区内の駐車場において、Ｊ所有に係るピックアップツール一式外約８０３点（時価合計約２６０万円相当）積載の普通貨物自動車１台（時価約４６万円相当）を窃取し、

第７ 同月８日ころ、同都ｇ区内の路上において、Ｋ所有に係る普通乗用自動車１台（時価約１００万円相当）を窃取し、

第８ Ｌと共謀の上、普通乗用自動車を窃取しようとして、同月１５日午前１時２０分ころ、埼玉県ｈ市内の駐車場において、Ｍ管理に係る普通乗用自動車に乗り込み、エンジンをかけようとしたが、バッテリー容量切れのためエンジンが始動しなかったため、その目的を遂げず、

第９ Ｌと共謀の上、普通乗用自動車を窃取しようとして、同日午前３時１５分ころ、同県ｉ市内の月極有料駐車場において、Ｍ（当時３４歳）管理に係る普通乗用自動車に乗り込み、工具を用いてエンジンをかけようとしていたところ、Ｍに発見され、Ｍ、Ｎ（当時３３歳）及びＯ（当時６８歳）から逮捕されそうになるや、速

捕を免れるため、同駐車場付近路上において、Mの頭部を所携のハンマー（平成13年押第289号の1）で殴打し、さらに体を力一杯左右に揺すってM、N及びOを振り回すなどの暴行を加えて路上に転倒させるなどし、その際、Mに全治約2週間に要する頭部打撲・挫傷、左膝擦過傷の傷害を、Nに加療約2週間に要する左膝部打撲擦過傷の傷害を、Oに加療約30日間に要する頭蓋骨骨折、右上下肢打撲の傷害をそれぞれ負わせたものである。

（証拠の標目）

省 略

（累犯前科）

被告人は、平成7年7月17日浦和地方裁判所で覚せい剤取締法違反罪により懲役2年に処せられ、平成9年6月26日その刑の執行を受け終わったものであって、この事実は検察事務官作成の前科調書によって認める。

（法令の適用）

被告人の判示第1の所為のうち、けん銃の加重所持を幫助した点は刑法62条1項、銃砲刀剣類所持等取締法31条の3第2項、1項、3条1項に、けん銃の発射を幫助した点は刑法62条1項、銃砲刀剣類所持等取締法31条、3条の13に、判示第2、第4ないし第6の各所為はいずれも刑法60条、235条に、判示第3及び第7の各所為はいずれも同法235条に、判示第8の所為は同法60条、243条、235条に、判示第9の所為のうち、M、N及びOに対する各強盗致傷の点はいずれも同法60条、240条前段にそれぞれ該当するが、判示第1のけん銃加重所持幫助及びけん銃発射幫助は1個の行為が2個の罪名に触れる場合であるから、同法54条1項前段、10条により1罪として重いけん銃発射幫助罪の刑で処断することとし、判示第1及び第9の各強盗致傷の罪について各所定刑中いずれも有期懲役刑を選択し、前記の前科があるので同法56条1項、57条により判示各罪の刑についてそれぞれ再犯の加重（判示第1及び第9の各強盗致傷の罪の刑についてはいずれも同法14条の制限に従う。）をし、判示第1の罪は従犯であるから同法63条、68条3号により法律上の減輕をし、以上は同法45条前段の併合罪であるから、同法47条本文、10条により刑及び犯情の最も重い判示第9のOに対する強盗致傷罪の刑に同法14条の制限内で法定の加重をした刑期の範囲内で被告人を懲役10年に処し、同法21条を適用して未決勾留日数中200日をその刑に算入することとし、押収してあるハンマー1本（平成13年押第289号の1）は、判示第9の犯罪行為の用に供した物で被告人以外の者に属しないから、同法19条1項2号、2項本文を適用してこれを没収し、訴訟費用は、刑事訴訟法181条1項ただし書を適用して被告人に負担させないこととする。

（量刑の事情）

本件は、被告人が、本犯者らが共謀の上、マンションの共用通路でけん銃を適合実包と共に携帯して所持した上、弾丸5発を発射するのを幫助した銃砲刀剣類所持

等取締法違反幫助（判示第１），単独あるいは共犯者と共謀の上行われた６件の自動車窃盗と１件の同窃盗未遂（判示第２ないし第８），及び自動車を盗もうとした際に，逮捕を免れる目的でその管理者らに暴行を加えて傷害を負わせた事後強盗致傷（判示第９）の事案である。

まず，判示第９の犯行についてみるに，被告人は，知人から車を盗むように持ちかけられて報酬欲しさにこれを引き受け，知人があらかじめ狙いを付けていた高級車を盗むため，携行した工具を用いてエンジンをかけようとしていたところ，その自動車の管理者ら３名に発見され，つかみかかられるなどされたことから，逮捕を免れる目的で，重さ約１キログラムのハンマーを振り回して被害者のうち１名の頭部を殴打したほか，体を力一杯揺すって被害者らを転倒させるなど激しく抵抗した結果，３名の被害者にそれぞれ加療約３０日間，加療約２週間，全治約２週間の傷害を負わせているのであって，粗暴で甚だ悪質な犯行というほかない。判示第１の犯行は，組織の対立抗争の過程で手柄を立てようと考えた暴力団組員らが共謀の上，自動装てん式けん銃１丁を適合実包５個と共に携帯して所持し，相手方組織の幹部が出入りするマンション居室の玄関ドアめがけて弾丸５発を発射するのを幫助したというものであるが，被告人は，暴力団組織には所属していなかったものの，犯行直前に本犯者である暴力団幹部に依頼されて，同人らを車で犯行現場まで送り届けるという重要な役割を担って犯行を容易にしているのであって，発射された弾丸の数が少なくない上，現場付近には住宅等が密集しており，本件犯行が近隣住民に与えた恐怖や不安は大きかったと思われることなども併せ考えると，その犯情は悪質である。被告人が行っていた自動車盗の大半は暴力団がいわゆるしのぎとして繰り返していた組織的な転売目的による犯行であって，高値で処分できる自動車を共犯者があらかじめ探し出すなどした後，見張り役を置き，エンジンキーを使用せずにエンジンをかける特殊な技術を用いるなどして盗み出すという職業的，常習的な犯行である上，被害金額は合計すると１０００万円以上と多額に上っており，被告人は，そのうち，前記の技術を用いるなどしてエンジンを始動させて自動車を実際に盗み出す役割を担当していたのであり，各犯行において不可欠で重要な役割を果たしている。被告人には前記の累犯前科のほか，過去に３つの懲役前科があることなどを考慮すると，その刑事責任は相当に重いといえることができる。

そうすると，被告人が，本件各犯行を概ね認め，被害者らに対して謝罪の手紙を書くなど反省の念を示していること，判示第８の犯行は，エンジンが始動しなかったため未遂に終わっていること，被告人の妻が出廷して，被告人を指導監督すると述べていることなど，被告人のために斟酌すべき事情を十分に考慮しても，被告人に対し主文程度の刑を科すことはやむを得ない。

よって，主文のとおり判決する。

さいたま地方裁判所第二刑事部

（裁判長裁判官若原正樹，裁判官大淵真喜子，裁判官小笠原義泰）

